

私の中の日本という存在

朴 素妍

I. テーマ&動機

II. Aさんとの対話

II-①. 日本での就職

II-②. Aさんの将来の計画

II-③. 両国の文化

II-④. 過去を振りかえてみて

II-⑤. 未来への歩み

III. 結論

IV. 終わりに

I. テーマ&動機

今回私は『日本と切り離せない、私の興味と関心』をテーマに設定した。最初はインタビュー相手を、バイト先の仲間で私より10歳も年上の人を選んだが、相手と中々都合が合わない事もあり、Aさんに頼むようになった。Aさんは私より年上の男性で、10月に日本に来たばかりの韓国人だ。韓国の大学生で日本語を専攻している。高校生から、独学で日本語を勉強してきた彼は、文科省の試験に見事合格し、奨学金をもらいながら一年間早稲田に通う事になった。今回私が相手をAさんに決めたのは、彼から答えを出して欲しかったからだ。『日本と切り離せない、私の興味と関心』のテーマは、私の過去と現在、未来の順になっている。小学生の時三年間日本で暮らした事がある私は、韓国に戻ってからも、また日本で住みたいと秘かに願っていた。そして高校卒業後、日本の大学に合格し、念願が叶ったのだ。何らかの縁でまた日本で生活するようになったのである。もうすぐ三年生になる私は、就職先をどこにするか迷っている。Aさんは韓国に戻ると大学4年の2学期をむかえる。彼も同じく就職を考える時期にあるのだ。何度か彼とはお互いの未来について話した時があって、その時の彼は計画性のある未来を考えていた。自分の日本語能力を活かせる仕事に就きたい、日本と韓国の架け橋となる存在になりたいと。そんな彼と対話をしてみると、まだ迷っている未来への出口が見つかるのではないかと思った。Aさんは日

本で暮らした経験はもっていないが自力で日本語の実力を高めてきた。反面、私は幼いころ親の仕事の関係で何年間日本に滞在していた。生活の為にも日本語を学ばなくてはならない状況だった。彼は日本語を勉強する為に来たのだが、私は日本語を使って大学で勉強する為に来た。つまり、彼にとって日本語は目的になるが、私にとって日本語は日本で勉強する為の手段になるのだ。Aさんと私は違う理由と目的を持って日本に来ているが、現在同じくこの先就職先をどうするかで悩んでいる。以上のように、お互い何らかの違い点も同じ点も持っているので、Aさんとインタビューをする事に決めたのだ。インタビューを始める前に、彼に状況を説明し、次の動機文を読んでもらった。

私とAさんは日本での就職、将来の計画、両国の文化、過去、そして未来への歩みの順番で話を進めた。

《テーマ》

小学校のころ、父の仕事の関係で三年間日本に滞在したことがある。幼かった私にとって日本は、衝撃的であり神秘的なものだった。初めての世界、初めて見る日本人、新しい食べ物、何もかも不思議なものばかりだった。日本語を一語も話せなかった私は、韓国入学校に通うことになった。そこで、韓国人ではあるが、どこか日本人らしい奇妙な雰囲気を漂っている子供たちと関わることになる。韓国人学校は、日本に滞在している韓国人の子供のために作られた学校だ。日本語をうまく話せなくて日本人学校に通えない子供、日本で長く住んでいるため、韓国語が喋れない子供たちが通っている。つまり、子供が日本でも韓国でも生活できるように手助けする教育機関なのだ。日本人学校で使う教科書と韓国の学校で使用している教材を両立しながら学ぶ。韓国人でありながら、日本人が学ぶものを学ぶ。日本の文化と韓国の文化が混合している学び場だと言える。日本と韓国の文化が調和していたり、衝突していたりする学校での経験が、今もこれからも日本と切り離して考えられない状況を作ったと思う。わたしは二年間、学校で、放送部のアナウンサーとして活動した。毎週土曜日の朝、学校のテレビに私が映り、みんなの前でニュースを伝える体験は、遣り甲斐と快感、または緊張感さえも感じるものだった。一週間の間、学校内や学校外を回りながら、不思議な出来ことやめでたい出来こと、みんなに知って欲しい事柄を調査する。それを参考に、自分で原稿を作成し、本番に向けて練習をする。毎日、放送室を訪ねて、一緒にアナウンスする同僚と打ち合わせをした。お互いに直して欲しいところを指摘しながら、先生の力を借りず、学生自ら動いて放送を作った。たったの30分の放送のために、何人かの部員が動員され、何日間の練習が必要だった。自分たちで作上げた放送を見るのは、とても遣り甲斐のある物だった。カメラに映るときは緊張もしたが、本番に入ると自然となる自分が不思議に思えたときもあった。そこから、自信を持ち、

放送にも興味を持つようになった。韓国人でありながら日本人と暮らす幼少時代の経験は、更に混乱も伴うものだった。同じ人間なのに、韓国語を喋っているということだけで、冷たい視線で見られるときもあったからだ。なるべく、外では韓国語ではなく日本語で話し、韓国人であることを隠そうとした。母国に帰国して何年経っても、日本でついた身振りや考え方、生活 방식はそのまま残っていた。どこかでは、日本を追いかけ、日本に憧れていたと思う。日本の文化に興味を持ち始め、日本の社会情勢に関心を持つようになった。父と姉が美術に非常に関心があったのもあり、美術館によく連れていってもらった。姉が日本の大学院に行くことになり、それにつられ、私も、念願だった日本での生活が叶う様になった。半年間日本の美術大学に通いながら、美術の基礎的知識や技術を習得した。芸術性を成長させる経験になった。とても個性的な日本の生活用品やアートは私にとって新鮮なものであり、勉強になるものばかりであった。そこから、日本の芸術性や創造性、独創性にもっと興味を持ち始めた。現在は、テレビ番組や雑誌を見ながら、日本の文化を探求している。特にテレビ番組に興味がある。小学校のころ、放送部で活動した経験があるからか、番組の構成が気になる。日本の番組は、独創的で斬新だ。そして、日本の現代文化もよくあらわしている。日本の番組を通して、日本の文化を探求しているのが、楽しみの一つとなった。もうひとつ最近関心を持ち始めたのは、日本の職場での接客態度だ。家の近くのデパートにある焼肉ストランで働いているが、今月で半年になる。高島屋デパートにある分、高級でおしゃれなお店だ。客層のレベルも高く、非常に質の高い接客とサービスを要求する。仕事の順位は厳しく、覚えるマニュアルの量は多い。が、今まで使うことのなかった敬語を使い、日本人を相手にするのはとても勉強になる。最初は生活費を稼ぐために始めた仕事だが、段々日本の職場での人間関係や構成、そして、一人ひとりの仕事に対する考えや信念を分析するのが楽しくなった。大学卒業後、日本での就職も考えているが、今の職場での体験は非常に役に立つと思う。日本の社会現場の雰囲気や日本人との協同作業等を体験しているからだ。日本のさまざまな分野の知識を習得しながら、もっと日本の文化と関わりたい。子供のころには見えなかったあらゆる面が、二度目の日本での生活で見えてきた。これからは、自分が興味や関心のある分野に真剣に取り組みたい。日本での生活や体験などを活かして、これからの進路を考えて行こうと思う。三年生になると就職活動をする。今はやりたいことが沢山で進路も具代的ではないが、自分が本当に興味を持っているもの、自分の中にある創造性や芸術性を最大限に活かせるものを探さなくてはならない。それが、今の私に与えられた課題だ。

Ⅱ. Aさんとの対話

日時：2008年12月8日 月曜日 19:30～21:30

II-①. 日本での就職

対話を始まる前に動機文を読んでもらい、感想を聞いた。

P: テーマについてどう思う？

A: ・・俺のように韓国にずっと滞在していた人は経験できない日本での暮らし、海外での生活から生じる大変さを感じたね。日本と韓国の二つの文化の中で生きる中で感じる心情、そして悩みや困惑さも伝わったし。それに、その経験が君の人生にとっても影響を与えている事もね。

P: Aさんは私のような経験をした事はないの？

A: 俺は日本に来てから感じたね。

P: 何を？

A: 君が昔、差別が嫌で日本人の振りをしたように、俺も日本に来てからはなるべく日本語をつかおうとしているし。でも、それは日本で生活する人なら誰でも感じるものじゃないかな？ また、日本での就職もね。

P: 日本での就職？

A: そう。俺もそうだけど、日本で暮らした経験がある外国人や日本に興味がある人、日本語が出来る人なら、日本で働くという未来の計画を立てるんじゃないかな？

P: そう？ 韓国に戻って就職しようとは思わないの？

A: 思っていないとは断言できないけど、俺は日本が好きだし、日本に憧れているからね。日本語を駆使する能力と実力を生かしたいし。韓国人だから、韓国で就職をする方がよいとはいえないんじゃない？

感想を聞いてみると、彼は自分と違う環境で育ってきた私の人生の物語が描かれていてとても興味深かったと言う。読んだ後の率直な気持ちを言ってくれた彼は自分が感じたままの感想をはっきりと言ってくれた。お互い違う場所、異なる条件を背景に日本語と向き合ってきたが、現在は同じ国で日本語の実力を高めている。もしも彼が私のように親の仕事の関係で日本に滞在したことがあり、生活するために日本語を学んだとしたら、彼は自分の未来の計画をどう立てるか疑問を抱いた。まず、Aさんがどの国で仕事をしようと考えているのか聞いてみた。話してみると段々彼の日本に対する思い、そして考え方を感ずるようになった。なるべく、彼が持っている日本語能力を活かしたがる彼の熱意を強く感じ

た。

II-②. Aさんの将来の計画

テーマが過去、現在、未来の順になっている事もあり、彼に彼が計画している未来の図を聞いてみる事に決め、話を進めた。

P:日本に来た理由、もしくは動機はある？

A:本場で日本語を学んでみたかったからかな。

P:Aさんは卒業後、何かやりたい事はあるの？

A:俺は日本と関連がある仕事に就きたいね。

P:それはいつからそう思ったの？

A:日本語を勉強しながらかな。大学でも日本語を専攻しているし。

P:日本で暮らした経験がないAさんは、どうして日本語を専攻していて、日本と関連している仕事に就きたいと思ったの？

A:俺は日本が好きだし、日本語に興味があるからね。それにさっき言った通り、俺の能力を活かしたいんだ。単純に日本語を勉強しているからそう思っているわけではないんだ。内心、日本と韓国の間でどの位置に立って役割を果たすかを重要視しているからね。

彼も私と同じく日本と関連がある仕事に就きたいと思っていた。が、日本に来た動機と目的は私と異なる。私は、日本でもう一度住みたかったし、過去の経験を活かしたいと思っていたので日本の大学に進学したのだ。Aさんは日本で暮らした経験はなく、高校生の頃に初めて日本語を勉強した。いわば、私の場合は最初に接したのが日本の文化で、彼の場合は日本語なのである。対話を通して、初めて接触した日本の分野がお互い違うことに気づいた。今まで彼と接してきて気づけなかった部分の一つひとつ分かってきた。Aさんは私と違って未来の計画をはっきりと立てている。本場で日本語の実力を高めたがる彼は意志もはっきりしている。自分が何に興味があって、これから何をしたいのかが、頭の中にはっきりと描かれているように見える。周りの影響に振り回されず、自分の意志で短期留学を決めたAさんだからこそ持っている考え方なんだろう。一年間の留学生生活を決断したのも、夢に対する熱い情熱と思いがあるからなのではないかと思う。将来の計画をはっきりと立てているAさんがとてもうらやましかった。

II-③.両国の文化

Aさんは後10ヵ月ほど日本にいる。今年の10月に日本に来た彼は、来てから2ヵ月になる。今まで韓国で暮らした彼は、初めての海外生活をどう思っているのか、疑問を抱いた。Aさんが考える両国の差異点について聞いてみた。

P:日本で生活してみて、いい点や悪い点を感じた事はある？

A:俺は、いい点悪い点だと思わないよ。それは異なる点じゃないかな？

P:異なる点？

A:それは日本の特有の文化じゃん。それを外国人である俺たちがあれこれ文句をつけ指摘する立場ではないと思うよ。一つの文化として受け入れるべきだね。

P:そうか。じゃ、人間性の特徴で違いを感じた事はある？

A:うーん。韓国人は情けの文化を持っているね。

P:情けの文化？韓国人が？

A:うん。韓国人は情を大事にするからな。人と人の中に行き渡る感情、優しさを大事にしていると思うよ。

P:じゃ、日本人は？

A:日本人は、相手に迷惑をかけないように気を使っている感じがある。

P:そうか・・・私はどちらに近い？

A:うーん。Pさんはどちらも持っているからな。

P:私が？どちらも？どんなところが？

A:はっきり決めつけられないけど・・・後天的に身に付いた、日本人ならではの特徴と本来君が持っている先天的な韓国人ならではの特性を両方持っていると思う。改まった場所や状況、形式的な環境では日本人らしく振る舞うが、私的な場所にいるときや気を緩めている時、気楽な環境にいる時には韓国人らしい行動が出るね。例えば、韓国人といるときの君は韓国人らしいよ。

両国の長所と短所を比較して優位を決めるのではなく、異なる点だとその文化の特徴だと認める必要があると彼は語る。今まで両国を比較しながら、これは良くない、これはとても良いと評価していた自分が恥ずかしかった。正直に私は、韓国人は日本人より秩序を守らないと、短気で人に気を使っていない、反面、日本人は他人に気を使いすぎて、距離感を感じやすいと決めつけていた。彼の意見は私の考えを見直す機会を与えてくれた。韓国人は人間の情を大事に思っており、日本人は相手に迷惑をかけないようにする。彼は両国

の人間性と国民性の差異を指摘してくれた。このような違いを、私は両国の生活に馴染んでいたのもあり、気づかずにいた面だったので目から鱗が落ちる体験だった。前、Aさんと初めて会った時に彼は、私が日本人の要素も韓国人の要素も持っているような不思議な印象を受けたと言った事がある。今まで韓国人と触れ合ってきたAさんが見て私は、完全に韓国人には見えないという。時々、日本人のように振る舞う姿を見せる時もあるらしい。それは私が日本で生活する為に、日本という国に慣れる為に得た特性ではないかという。本来持っている韓国人らしい性格と、日本でできた後天的な性格が混じっている今の私の性格は、両国で生活した経験と関連しているのではないかと言う。今回彼とこのテーマをモチーフに対話をして自分で気づかなかった事実を知ることが出来た。私の中に日本という存在がどれほど大きいのかを改めて感じた。

II-④.過去を振りかえてみて

Aさんは、動機文にもう一度目を通し、私の過去に関して聞き始めた。

A:Pさんは親の仕事の関係で日本で暮らしたんだよね。

P:うん。どうして？

A:過去の経験のところを見てみると、とても日本から影響を受けているからね。親から与えられた経験だけど、結局、Pさんは日本が好きになったんだろう？

P:うん。

A:俺は、それが君にとって、とても良い影響になったと思う。その経験が良い過去もしくは良くない過去になったとしても結果的に君にはとても利益になったんだよね。今、君は日本で生活しているし、憧れの国で勉強しているからね。それが、将来の君の仕事にも役に立つかも知れないし。

過去の日本での暮らしが私にとって、利益な物なのではないかと思っていた時期はあった。が、留学生生活を後悔した時もある。Aさんは私に、とても良い経験ではないかと語る。結果的に良い利点になったと考える展開が必要であると教えてくれた。将来の仕事に繋げる要素になったというのを、再認識する切っ掛けを作ってくれた。

II-⑤.未来への歩み

今後、どこで仕事をするか決めていない私は、彼に意見を聞いてみる事にした。彼なら、

良い解決方法を模索してくれそうだったからである。

P:もし、Aさんが私のような人生を歩んで来たとしたら、Aさんはどんな未来を計画すると思う？

A:場合によって違うかもしれないけど、俺は日本で就職する方に決めたと思うね。

P:どうして？

A:君は両国で生活した経験を持っているし、君にとって両国は、大きな存在でしょう。自分に与えられた特別な能力と機会を、俺なら活かすと思う。韓国がいいから韓国で働く、日本が好きだから日本で就職したいと考えるのは間違っているね。

P:えっ？

A:俺は本当に自分がやりたいと思う仕事をしたいし、その夢を叶う為に努力している。Pさんは自分が本当にやりたい事を見つける必要があるよ。やりたい職業をどの国でした方が得なのかを良く判断して決めるべきだね。君がやりたい仕事の分野って、放送や芸能系だよな？

P:うん。

A:それを中心に、柱として、他のものを合わせたほうがいいよ。韓国で働きたいから、日本で暮らしたいからで決めるのは違うんじゃない？自分がやりたい仕事をするために頑張る努力、夢に対する情熱が、国に負けてしまうからね。まず自分が放送系の仕事をしたいのなら、その仕事をどこでやるのが自分にとって効果的なのかをみるべきだと思うよ。韓国のほうが役にたつのか、日本の方が役に立つのかもね。

P:けど、現実がそうさせてくれないわ。日本で働く場合に伴うリスクは大きい。日本の職場で働いて、ついていけるかも不安だし、結婚を考えるのも難しくなるわ。勇気がないの。

A:それは、自分の心構えによって変わるものじゃないかな。日本と韓国の文化を理解していて、暮らした経験もあるというのは、両国のどちらを選ぶかにしても、適応する力は整っているともいえるんじゃない？自分が中途半端な立場にいるから、できないというのはネガティブな発想だよ。

P:できないとは思っていないよ。ただ、今後は不安なだけ。

A:それは自分で克服できるさ。どのように自分が自信を持ち働くかによって、どんな壁でも乗り越えるものじゃないかな。考え方を考える必要があると思うよ。

P:私は現実的に考えて、恐れてるだけよ。

A:でもその不安は誰にでもあるものだよ。

P:誰にでも？

誰にとっても新しい職場で働くというのは、不安なもんだよ。誰だって、新しい環境は怖いものさ。勇気を持って取り組んでキャリアを積めていくのが実力なんじゃない？入ってから勝負だと思うね。恐れずに、自分に託された仕事に最善を尽くすのが、大事だよ。頑張ると努力すると、不安は自信に変わるものさ。これから勇気を持って、挑戦する姿勢が君には必要だと思うよ。

このテーマに決めたのは、日本と韓国のどこで働くか決めたかったからだ。日本で就職する場合、得になる面は多少大きい。経歴が積みられる。興味がある分野で仕事の技術を習得できる。日本の放送番組は独創的で創意的だ。私にとって、それは興味深い。しかし、また何年も親と離れることになり、決して安定的な生活を営えるとは断言できない。どの国で働くとしてもリスクはある。リスクに対する不安感を抱いていた私は、自分がどの道に進めばいいかを決められずに迷っていた。Aさんは、不安は誰にでもある感情であり、そのリスクを今から恐れる必要はないと言う。自分が本当にやりたいこと、自分のためになることをした方が、私のためになるのではないかという。彼の意見を聞いて、不安感を感じる必要はないことに気づいた。何かを得るためには、度胸と勇気がある。もっと、何かに挑戦する情熱と勇気を持つ必要があると思った。

III. 結論

今回『日本と切り離せない興味と関心』をテーマに書きながら、日本という国の存在がとてつもなく自分の人生に影響している事に気づいた。過去も現在もそして未来も。私と共通点も差異点も持っているAさんと対話をして、自分の誤った考え方や心情を改め直す事が出来た。お互い今後について真剣に話し合った事はなかったのだが、今回これを切掛けに考えてみたと思う。彼も、もっと具体的にこの先を考えるようになって、韓国に戻ってからどうするかを計画しているようだ。また、一年間の留学生生活を誠実に過ごしたいと改めて思うようにもなったという。より自分の為になるように、充実に生活していきたいと語ってくれた。私も、彼との対話を通して、不安感も消え、今後の計画が具体的に変わった。私の中の日本と言う国の存在の意義を確かめる事が出来た。

IV. 終わりに

今回の活動を通して、相互の関係性や考え方が人とのコミュニケーションに大きな影響を与えるということを改めて学びました。自分の進路について考え直す切掛けにもなりました。

た。また、決められず迷っていたものが、一つ一つ解決していくようにも思えました。作品を仕上げる前と比べて、一歩進んだ道を歩んでいる自分を見つけました。考える日本語の授業は、これからの歩むべき道を教えてくれました。一つ一つの活動がとても意味のあるものでした。みんなで検討しながら、徐々に作品を仕上げるという活動は、他の授業では味わえないものでした。遣り甲斐と快感を与えてくれた授業だったと思います。